

あいだ／生成

第一号

二〇二一年

あいだ哲学会

Between / Becoming, Vol.11, 2021
Society of In-between Philosophy

あいだ哲学会規約

- 1 本会は、あいだ哲学会と称し、事務局を京都大学大学院・人間環境学研究所武田宙也研究室に置く。
- 2 本会は、〈あいだ〉への問題意識にもとづく哲学的研究とその発展を目的とする。
- 3 本会の会員は、京都大学大学院人間・環境学研究所武田宙也研究室の関係者ならびに委員会の推薦を受けた者とする。
- 4 本会は、次の事業を行う。
 - (ア) 学会誌『あいだ／生成』の刊行。
 - (イ) 研究会、講演会等の開催。
 - (ウ) その他必要な事業。
- 5 本会の運営を遂行するために委員会を設置する。
- 6 委員会は、若干名の幹事を委嘱することができる。
- 7 規約の改正等の重要事項については、委員会の審議を経て決定する。

『あいだ／生成』投稿規定

- 1 投稿資格は原則として会員に限る。
- 2 投稿論文の内容は未発表のものに限る。二重投稿は認めない。
- 3 原稿の採否は委員会の委嘱を受けた編集委員が審議の上決定する。
- 4 掲載された論文の著作権は著者に帰属する。掲載された論文等は原則として電子化し、インターネット等を通じて公開する。

〔編集後記〕

『あいだ／生成』第11号をお届けいたします。本号の巻頭を飾る論考は、ローマ・クアドリエンナーレの展覧会規約改変の推移を辿るもので、近年隆盛する芸術祭研究に新たな視座をもたらします。またアンリ・ベルクソンについての論考では、新進気鋭の研究者が独創的な解釈を提示しています。国内では十分な研究がなされていないリジア・クラークに関する論考も、今後のクラーク研究を担う貴重な仕事といえるでしょう。加えて書評ではジャクソン・ポロックの再解釈を行った刺激的な書籍を、展評ではテート・モダンで開催された大規模なナムジュン・パイク展を扱っております。COVID-19の流行で学会やシンポジウムが縮小される中、本号が少しでも知的生産の場となれば幸いです。

(松本理沙)

〔編集委員〕

蘆田 裕史
 ニヶ崎 彬
 石田 美紀
 石谷 治寛
 岡田 温司
 岡本 源太
 喜多恵美子
 武田 宙也
 橋本 梓
 山内 朋樹

〔編集幹事〕

松本 理沙

『あいだ／生成』 第11号

発行日：令和3年（2021年）3月26日

編集・発行：あいだ哲学会

【論文】

- ローマ・クアドリエンナーレ研究
——展覧会規約の改変過程から——鯖江秀樹 1
- リジア・クラーク作品《食人のよだれ》における集合的膜の表象
飯沼洋子 14
- ベルクソン『道徳と宗教の二源泉』における神はいかなる意味で愛の対象なのか
濱田明日郎 34
- 【書評】
- 寛菜奈子『ジャクソン・ポロック研究——その作品における形象と装飾性』
松本理沙 51
- 【展評】
- 「Nam June Paik」
李珉炅 56

あいだ／生成

Between / Becoming

[Article]

- SABAE Hideki** How Did the Rules Changed?:
On the Exhibition Regulations of Rome Quadriennale 1931-1956
- IINUMA Yōko** The Representation of the Collective Membrane
in Lygia Clark's «Anthropophagic Slobber»
- HAMADA Tomorō** En quel sens Dieu est-il objet d'amour
dans *Les Deux Sources de la morale et de la religion* de Bergson ?

[Book Review]

- MATSUMOTO Risa** Jackson Pollock Kenkyū: Sono Sakuhin ni okeru Keishō to Sōsyokusei

[Exhibition Review]

- LEE Minkyong** Nam June Paik